

杏林医学会雑誌の電子ジャーナル化に当たって

杏林大学学長、杏林医学会名誉会員 長澤俊彦

杏林医学会雑誌の創刊(1970年4月)に当たって、学園創設者の故松田進勇先生は「人類の健康と福祉に生涯をかける者は、その業績を青史にとどめる必要がある。ここに参集された方々は、いずれも学究一筋に自己生甲斐を感じておられる方々であるから、このたび創刊した杏林医学会雑誌に進んで玉稿を寄せられることであろう。私はそれを誇りに思い、かつ期待している次第である。本誌が医学の進歩、人類の福祉に寄与することができれば、我々の精神もまた、誠に悠久無限なものといえよう。」と述べられた。それから幾星霜、先生の期待に背かず、37年の間に雑誌の内容は歴代編集委員会委員の弛まざる努力によって、原著論文と症例報告のみならず、総説、年度毎の医学部と保健学部各教室の業績一覧、大学院博士課程論文の抄録掲載など、杏林医学会会員へのサービスが豊富となり、雑誌の **quality** は年々向上していった。そして時代の変革に伴って、ジャーナル版に切り替えられた。しかし、冊子の形式が変わったからといってその中身が変わるわけではない。初期の頃に編集委員を務めた者の一人として、その頃本誌に一生懸命原著と症例報告を400字詰原稿用紙に手書きで投稿した者として、このように杏林医学会雑誌が発展してきたことは、ご同慶の至りである。ちなみにわが国の大学医学部の機関誌として一番古いのは、東京大学医学部の東京医学会の発行した東京医学会雑誌で、創刊は明治20年(1887年)である。米国で有名な Mayo Clinic の **Proceedings of the staff meeting of the Mayo Clinic** の創刊は1926年である。日本でも欧米でも大学の機関誌に掲載された原著論文がその時代の基礎・臨床医学に旋風を巻き起こし、今日でも文献として引用される例は決して少なくない。

杏林医学会雑誌も是非、これからも格調の高い医学部・保健学部の機関誌として歴史を刻んでいていただきたい。そのためには、①会員、特に若い世代の会員の積極的投稿をさらに喚起する、②優れた論文1~2編の著者を **The best author the year** として表彰する、③C.CやCPCの内容掲載、新しい診断技術の紹介など、内容の工夫、④年に1度の英文誌の刊行、などが考えられるが、雑誌の **quality** を高めるためには原資が必要であり、資金獲得の工夫が目下の差し迫った課題といえよう。杏林医学会会員全員が杏林医学会雑誌をさらに育てようとの意識をもって、杏林大学、あるいは杏林大学医学部附属病院を場とした教育、研究、診療活動の成果を是非杏林医学会誌に反映させるよう努力することを期待して、電子ジャーナル化を迎えた本誌の巻頭言の結びの言葉とする。